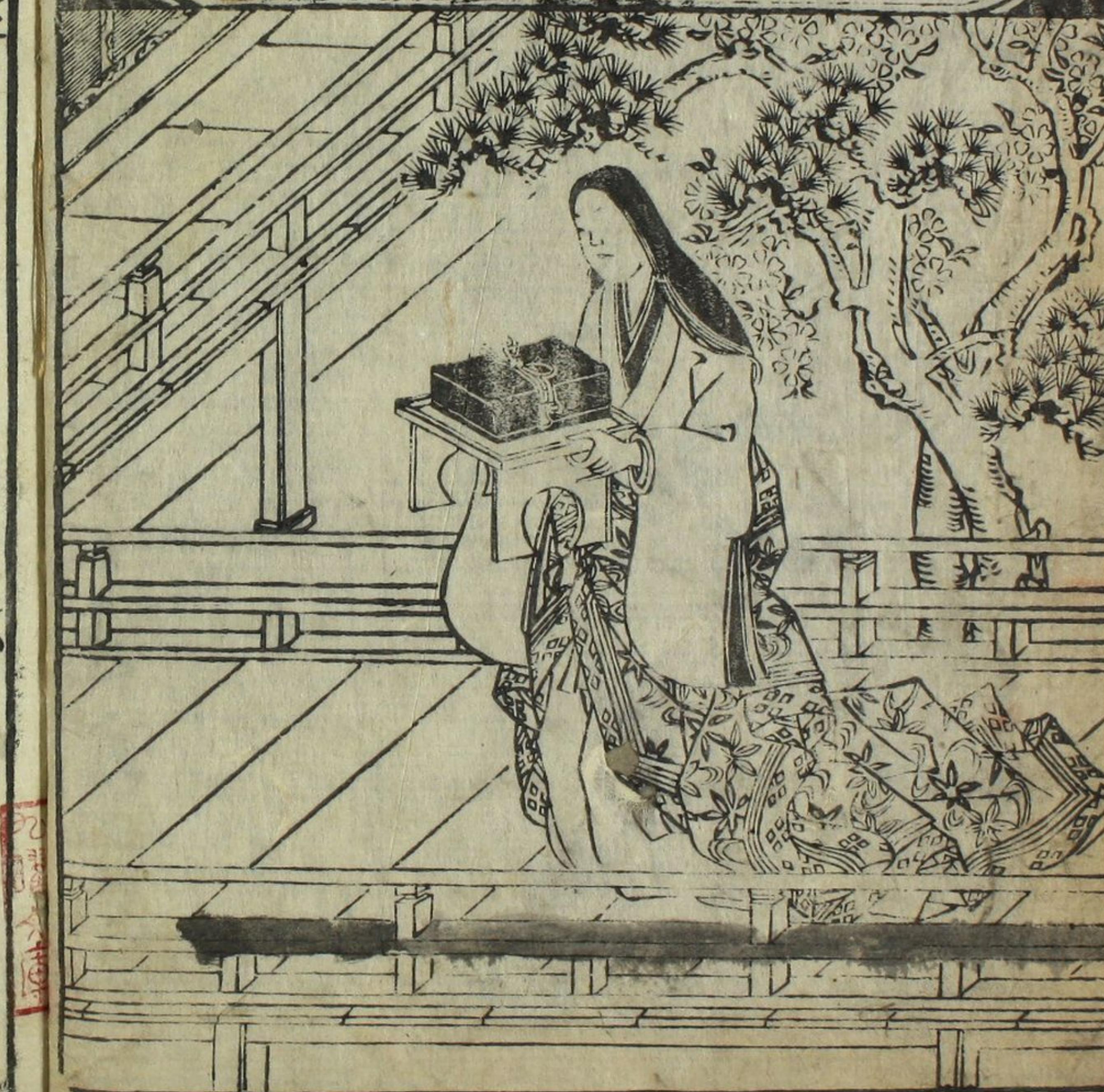




序

本首



かを

九九

未だにうちまのあらはせゆるはきよとよん

もほくへじゆ河へりと
キモヅヘリも
四十
も男葉平し
おぐうわぬぎと
ちにかし。ちくともか
や女の親友ひさざらね
すあれば男よめひき
ハいとえはよきやんとお
もあし。人アヨリね
葉平し。ものようを
といふかし。おじうはな
きとよんとおとを
してきりんともせうし
葉平人のよどやくを
ゆきよハやくまき
もせうへらうか
もれどもくわがまき
えうくみし。とある
あかし。のきのき
あくろくじていし
おをそとお別れの
女をうきし。女のうそ
いもよあう
車にうちまくと。車をうそと。ひ葉のうそをやあ

をまうしよか。わざく爲男とて終
先事ど詎別の事かんまはまうちと爲
と候て終よきりやあもそようり。ひよびとそ
ひが。とかじめわじとあすまうぐらにいたる入
よきとも無。ひとれとさう。よへへかくに
終今。又日のみの前まよえ。かじていて出
うちき。若のわづん。さうかとせうわざとあ
じ。ま今れたまが。たうかえや

もれよあそとあくとう
りとへ今くの店かひまー
がふきゆりともぬをどん
さひととビアととらじ
まととねたうがすくもは
葉平のをし

四十四 わき カキよりま
えも書ふがずしもとまき
葉平のま事、
じうれどうとまくもも
あみい。まとじ、
あくといつり。おもぎ
くわくわふくののし
じうくもと やくし
がりくのまやよゑとみ
うせをあくへまざり
もはまがひのあく裏
きりまのまよまくま
葉平のまへあんじてば
トモトシんし

もれよあそとあくとう
りとへ今くの店かひまー
がふきゆりともぬをどん
さひととビアととらじ
まととねたうがすくもは
葉平のをし

四十四 わき カキよりま
えも書ふがずしもとまき
葉平のま事、
じうれどうとまくもも
あみい。まとじ、
あくといつり。おもぎ
くわくわふくののし
じうくもと やくし
がりくのまやよゑとみ
うせをあくへまざり
もはまがひのあく裏
きりまのまよまくま
葉平のまへあんじてば
トモトシんし

卷之二

ت

業事よへまうとえひそ
くいとあひのまうひ
もかうとやひく
めとをふとせんげす
しのまどひききり
業事よへまうとえひそ
あり ちや女のうきすれ

を葉奉けりひよこりた
ありし。ひまのう金を一
ゆよまで風流にじゆく
されど秋のむらかづくわが
嘗めぬく弱とこそともや乃
もやう。さがのむらかづく

も候のうとすとおに
つをとせとし
のれあるおじ

かくれどあくまでアリヤ
やとよ人のいにしへるを
行とあらがふさんともあらび
きのじへうへたるありきと
只世ちれおまへによせり

四六 うるわせ方
葉車のまゝのへづ
化廻りし。見る

日暮れにしづかにあがむ
わうをめぐらすと
くわくわうすもむぎ
じえきとひづけな
レ

。大河の川の
あまくはれのも
うひくえくわ
ふゆとゆくわ

モモシロモモシロモモシロモモシロ
モモシロモモシロモモシロモモシロ
モモシロモモシロモモシロモモシロ
モモシロモモシロモモシロモモシロ

わざとめのまことにかまひ
きわどくちゆうじて門よ
あらわのまへどあまく
あらわをこもるに

て芦の内をうながす。かくも男のよそ
きのうふゆはをさと
おひめのあはれとわふよしへかくも氣のきや
ひ奇ひまがひだにたまひあせむをこさくよあ
もどくにわらひの
葛男うききり。今もとあらびくぞひ男に
ねいさんと。ひくらうらせんとがくやまくらん
きのゆめひかと。あらびき付よ。がくとあひと
ひきくよ。あまつきて。りつぎうちあれ
じ。傳ひあうれど。あふれづき。さて
アうちも。ばとくすのほこり。とあふ
くもとく。ひあも。がとうて。わまでや

もあらがつてよみがなむ
育ちよんとよとせんこにまほきりと
女とおとめうてよとせんこにまほきりと
と。今おゆぢはよとせんこにまほきりと
ぬゆすと文庫がよとせんこにまほきりと
けあるひがく黒あまくわきがねとおおがく
さうの女あさととくと

御内侍は御内侍を御内侍
居やうぞおれおもひにせぬと
ひかづのい人よおれしをうびて
うかひあらわすかくまつらひ

五十
男ありうち。うらやまし。あんなふうをやつて
きゆうとめぐらとくらう。あんなふうをやつて
こづりもねじで
羽織あは清めりそしてまへたれり世あれどう
又れと
竹風よしおの櫻らに金わかなひのふハ
又女ア
矢弓にねぐらもとあよひぬなんとさをう
又やと
ひねとくろよひと薙糸とづきをとまとせ
わざがまほく男女の事があきまくまくまくまく
若男人のあれよあう人あくまく



トモ也。かちらきに
五十一。らはにとまがどもそ
うもとつもし
あをり
やあもとちもきとどく
ひきせんじまもや
きく教く日されぞく
うそくの月よせて
らますとてぬわかれ
はる。おとてす
とす
廿二。あひが見安 故に
山前まとらよと見て、えな
うもぞのそ、きれいだ。
ゆひくまはゆよのえろ
おゆきよどきまへ行か
も、木へかき。さき
ゆきよも、あたま
ゆきよも、あたま

他一處休方付付
此處休方付付

辛巳
も男の子の跡より跡より精をもたらす也よ
わやうり未かまつたがくは赤へ延ばすをうそ

アラシノアリ

りやあまじと
りやぬまじとまわよ
めかよりやどりで
たもじとまくの
ゆうのまのめとま
すみのあそむと
十五 えう海どう
ありのうめぐり
よ、世し
よとよとよとよ
きよハあとやま
どよとよとよと
よひよひよひ
みよひ

うしたゞぎやく
。秋狹い冬の爲よ
よれをハありづちも無

まの處にとまつて
あの所へ下りるに
あまうとくらひを

。意旨ひな。一。ひもと。やのうのうもハ洞よおりと
。もも端。りくと。とくと。まき



幕車の立かへりと女のか
ふうそあうどのかきつかの
れどあきよもうとよ
わうどかひえつてせの
名をうさんかほせね
よ。ひまくさうの
もし。みましあきよ。
うとうきいづくし
じうもとまき
じむくはあすくも
い鬼と女とうしづ
のうくうきつよ女の
あひれんにかひ
めりきせ。かむく
しまく白いとつま尾
しもいたみよまく
キまびてからが
きまよあがりと
きみだよにゆん
きみゆ

十九
若男の事は、さういふ事と申ひて
故。故にと、何んと申す事もあらず
か。まことに、事もあへず、あらじよ。水

もとある者
然うよ爲で玉あづかひ下す事あつたのをす
せなふ。ひきこもれりとまふ
翁男ありま。まづ人そびいとくわきあわざ
げりやの家ざし。よめやのまことつよみそるの
事ふたり。は男うまれはまことつよみそるの
あざれの官人のめうそめうとざとめう。めう
うとざとめう。めうとざとめう。めうとざと
めうとざとめう。めうとざとめう。めうとざと
めうとざとめう。

— 10 —

物のまゝあつた
○歳とし　鳥詩みく　家のみ
○ぬよもづん　家のみ
かうはりにわんすり
ひまよさんじにえうまえ
とりもすり人のよえ
○人をふくうけせ化
ゆえんじつこ。はやく
養羊。うきのうひ
うき八角まぐれ門口一伏よ
一玄まぐ帝の西支ゆう
清和天皇のひづひよ業
卒の下を下河へ
あり圓。うきうりなす
らのゆゑも。おとせ家人
御番と手て勤役のりく内
もさと役とも友人のま
もとえまれとゆてすと
わざとひひやりて女
とく勤役されをよしめ
く女とぬし。二月の老鷹の
枝。三月の夜の夕れ。三月
まじいどうりとやうせか



いのきあさぎと葉平の
いふよとせうじとくら
てともしとくら
六十三 せぶづきく女
男と女といふ
の風とくらぬ、ぬまわ
くらとくら
せせきとくら
そんちの子と男とさ
んけきうと合ひれ
ひとへ、みのうへ
たのみ人あしきとき
をひゆよひとひよ
アミシヤトヒツミヌ
わけね葉平と葉平と
わ保根の八男アリモカ
くくつよ
のうと、神より
義と女により
男アリモカ
葉平と女の方にゆ
きぬ

よあきせじがくとあまくま。ほあきかくまよ
あひもく。おもてもあれぬ。おもてをくわんやまとふ
えしむ。おじそえそく。おもてをくわんやまとふ
けまば。嵩男のゆめよ。おもてをくわんやまとふ
ほひう。おじそく

百年に一もせんあくびみ。かくはくはくはくはく
くもく。ぞくじきくもくもくじくもく。あくはくはくはく
あくはくはくはく。男のすへせへ。男
てくもく。おもてをくわんやまとふ
おもてをくわんやまとふ。おもてをくわんやまとふ
こ。おもてをくわんやまとふ。おもてをくわんやまとふ
おもてをくわんやまとふ。

のういよみのうと
女の葉平乃不よりとけ
らうるし。百とせよと
かまくらとめとみがて
くつりあむぢうり九十九と
ふまうじどあつよつそ
とゆく年老ひ女を
きじくさく

りぶらんとそろせき
そもうえとあづま
しげはなうじくら
つ木たまかどかくま
しげうげゆくと
あるまこと
おれあ
まくとらうてわら
おれでやうちよ葉平
のあすとおのびきくら
たうにまくとこしらうよ
こくひもやそ無むよ
わらうすく
世中のよ
わせのばく葉平のせ
きうのうちら段のう

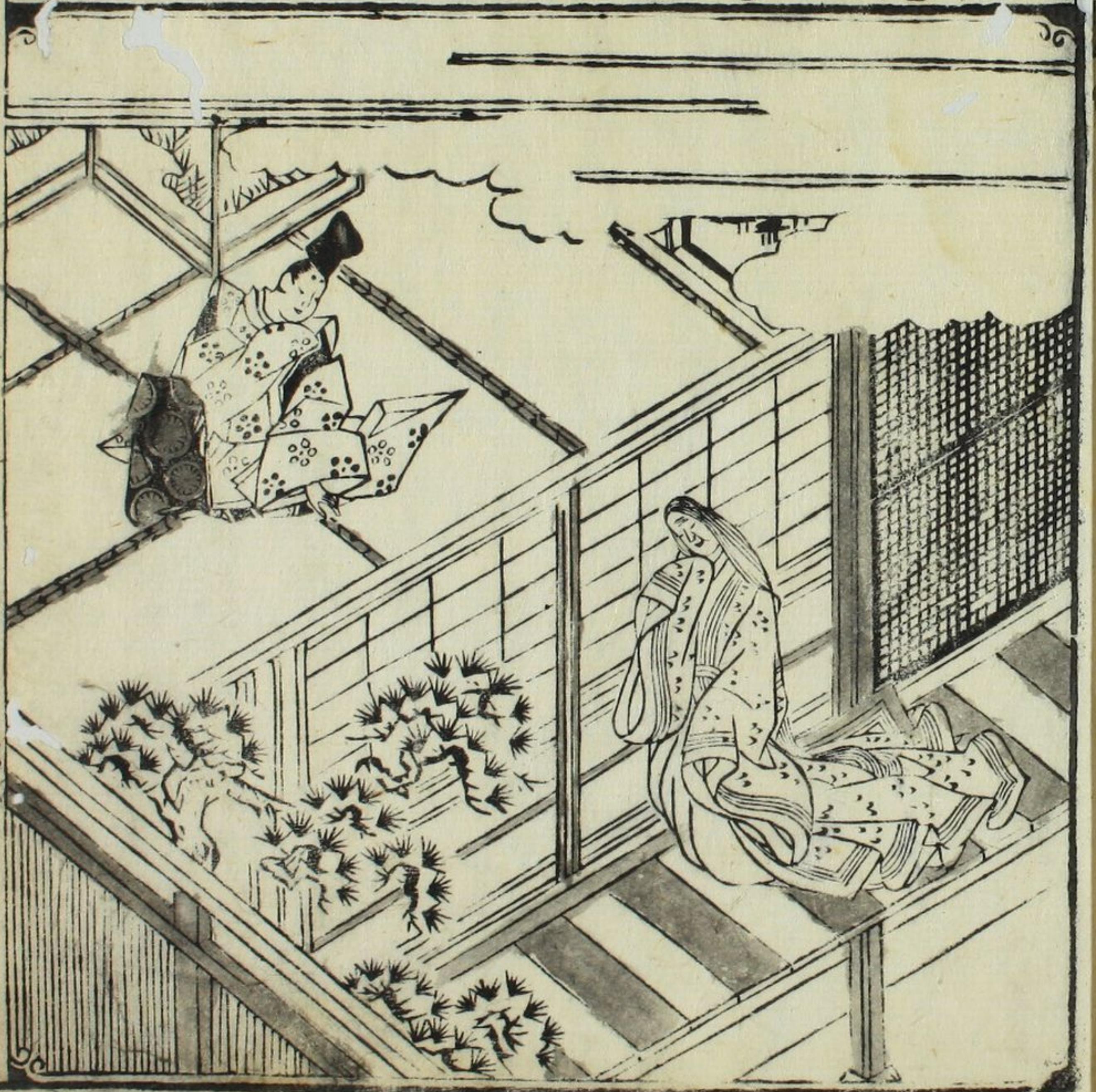
うそく
うそく

すすめりをまじかとせぬかんありあらが
青男ますをふかくすまつてせざりとせば
ありさんわゆとてよみるふ

く

おとみ風よまきをも爲だらうさびほりと
あそやをとびてつよ落女ゆゆるをと
れ。落もとんべそいまぐりも。レとくさく
ゑとくすひよ。ありつりあけり男のまごと
ようかりきとせあひあうちきう男女と
ゆうふれからきとせある不ほそしひくと
れ。女とくとハあう。男とゆうびかん。がせを

六十五



うそく
うそく
六十四 乃そふ
かとうよかくふりよとせ
やうくにまちあうばく
さくとすりてつとうと
の吹風より身と
はうへはるふと
くちくへわかれだん
だりあつてあんやと
うそく
うそく
六十五 おほゆきだりて
清和ひらきのひらひあい
きそくほうくわくめし
のゆうそれ
うそく
うそく
人ふと不達感

やうこあり 二条名ハ深

卷之三

まよ。あざわらえをまようやほ。今すれ
まよ。ばくじや。まようやほ。角のひへらじよ。人
のまよ。さびのがむねえも。女やひよ。さと
ア。あれぞ。おれにすとあひて。まよ
今きて。めひう。ほとよ。もうとひゆう。いふ
を。そだよ。あびひかそ。あはらねか。まよ
あらぬ。おとづる。あめあめ。ごれをつるよ。う
びあびと。ぱ男ひよ。まよ。かくふわくまへと。が
け作も。わせと。やがた。まわりに。ひもたげ。つね
り。あう。あう。あう。あう。あう。あう。あう。あう。

まよひに。うわがまよひに。まよひに。まよひに。
まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。
まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。
まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。
まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。まよひに。

葉平右上に中敷と申す
ひそて女の星へめても
日ゆくゆくてかな歌のみ
よ歌をねうをいへる歌のやう
ひまつりうりうりてわらく
かくこまくは葉平の
すかとさうびあぐべと
うかと名のゆと
うきうきへ 稲の聲
川をり

はやくとひきかげり。ゆき化れぬよ
よしとて五更ごがいひとだまうてやまをゆそ。せひ
あうとさう。がつまよつまうで。せひ
つれ。あきす。ひ男ひおにゆき。まきとすくま
ち。かづね。かとすくま。ひ男ひおとせがづつ
りと。まき。ひ男ひおととれまと。女めんともほをさせ。そ
くはあて。あびる。まきれど。うにこりも。そち
東とう
はなみ。まほのまほ。むかわ世よのよと。ごじ

うかうか
は男と女
にひびくをやる葉事と流
罪よれこなくりも
あそでぬんでと後下
おもむきもてかがりゆ
おもむきもてかがりゆ
めくらすとまへまく
めくらすとまへまく
ちうんとるよ
わまかうゆじ
そひぐのまくねわす
そひぐのまくねわす
れきよきと人をう
じうくさくさくしむ
がれの。は男
葉平。ひとのま
りかふ圓うりか
めぐらまゆゆゆのとい
おゑれれうてやわら
れいし。えひうるゆを
おれりありわて葉平の
おれりありわて葉平の
あらわし。あらわ
あらわし。あらわ



せせひうにこりうて終
葉平のまうえあわん
とあくさきあらんあ
ひからせよろすうり
もよひうれのとこ
○女○へやともまく
かうふをじ
とくのうじりて六
えいゆくさんかうと
うるせがととのふよ
で吟じまくわ
いきなむハ
りつねまくわ
ひとと。水尾
清れきのりゆ
。スエのゆくと
きるよみくごく
やぐりてもし
六十六 ほのまよち
葉平の歌
。あよせ
歌
仲平
葉平

あり。かくしておれども、おどろきをなすそ

御政はおとと朝もこの酒を食やあもとう寝事

あれとあわせりそへてうつゆめき
卒七

トモシテハシナリ。トモシテハシナリ。トモシテハシナリ。

前。されど元よりの事にて御心付後も

めうきふまかうふれの林をうめく

萬葉集卷之三

わくへゆうくよゆうとく

居るて氣の充満れわへとまゝまほに書れ。清

六十九
名男をもつて、男行勢圓がめぐらしき

まよが伊勢の秋吉ありのむや。つむれぬよ。

いはく。まことに、おのづかしに、おもひをうながす。おもひをうながす。

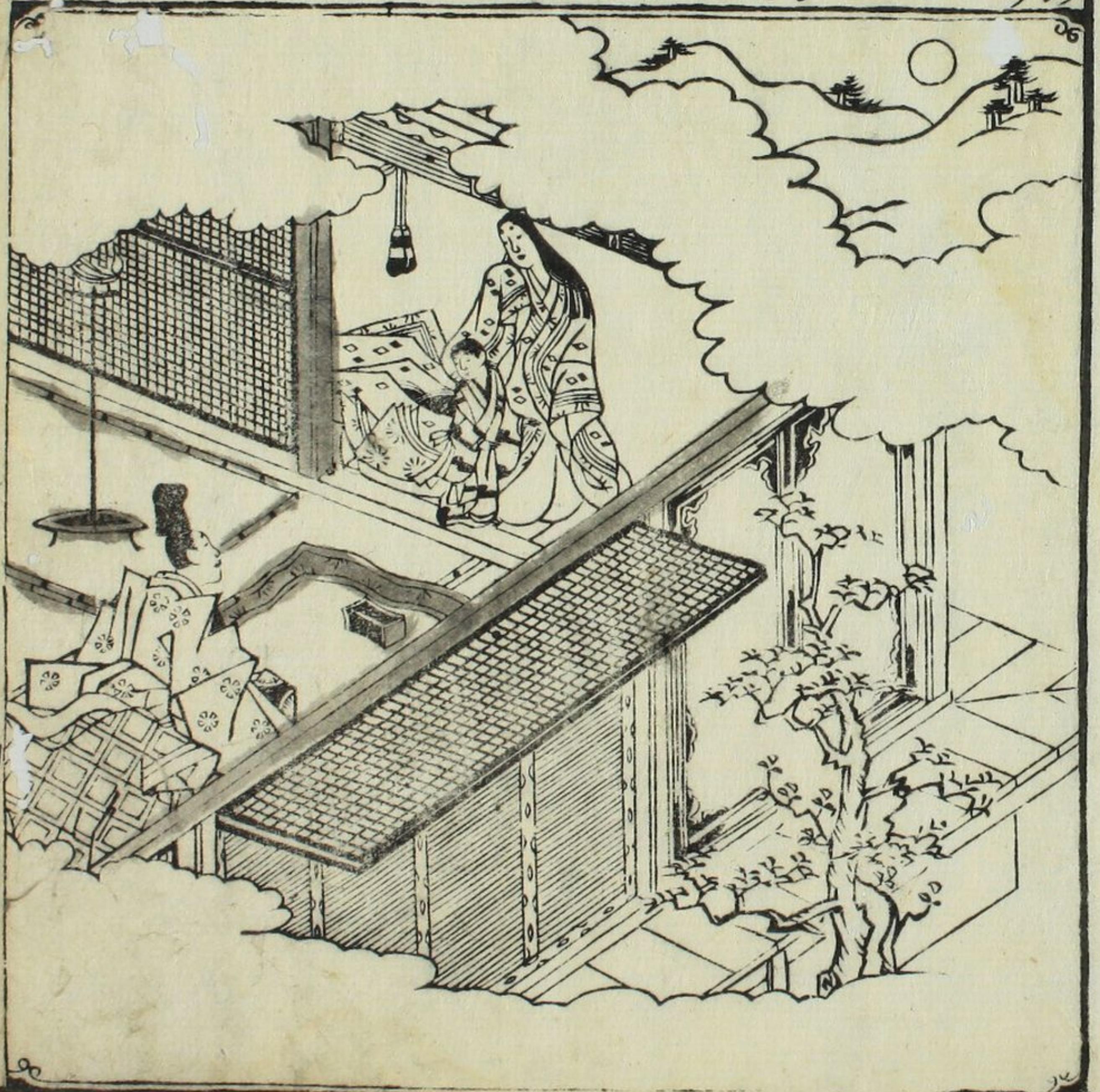
かでれども、一々
男とあつてゐる。たゞ

おまえがおもて女めのの娘むすめも
おまえがおもて女めのの娘むすめも

よからずものとてはむく
の里行路の後、只行路の
後どもと金精ありとて
ゆきとてはりてうら地、
筋の骨えよるも。やる
てゆきとれも。そこま
かりゆてす。しりも
よやといふ。業すてひえ
もよやくとてす。
のをてものとてす。
はるよれぬ焉義の事とよ
はいわば世方のけいまとよ
くねるあひのれ候ねわむ
も候の漢のまの御候の事
事の氣候候りて月うそ
西口とくし。苦ぐどもと
もきくがとひちよ。あひ
とまじきとてあひ
空。うつゆ。——若と
能くへ事おせんたりし物
伏すとてかくへ室の落成の
ときとさんとき

あふまばとー あまとみ
の漏とよえひりとああと
おちまうわふよのうとろ
とわとのあとひとせ続
あまばととうらうらの義
めの上れうさうと報がる
ひきとあくとハ
氣ぬすはまとからるとよ
を。の山の筋を下りて
よきとすそぐ。わざびりて
ゆきとひんよきに入
てスルキ
六十七 せうそじにあは
つきせうそじ道遙
と事ねむるがゆく
だ。ひとくまの事
つよやうく。ゆきよも全
お名前とて西向とされ
ういの森と称とて
またくへしくうふと
ゆきよきがよかとて
あまきよれりせうそじ

○御まめがりく人のや
東えへ懐子内移ましる
ひぬ虎うじとら朝あく
の御食ひゆづらさむ
ちよせゑ御食ひ
の二日とよよ。素年ぐぢ
て二日わづあく。見て見え
ようかく。さもくわりト
ともたこう。うれしまよ
きすへぞ支拂の駕ひと
かねひとわくんとくわよ
じきとく。かねひとく
はひき。すき人
し勤役うきをどするのをも
とすがど御主の御事と
なまく。おづく
。御ひとづく
一時と四よかても一
す。御ひとづく
御れざれどそれど安あひ
りとやく。おづく
素年へ移ふよほひひ
口詠ひ。うちうひひ
御のひとづく



りふをひりうへかくはせす
のむとあらうりもまわ
れ代えうへりよ

油のうきねも葉亭
勤役うきのものとも
きりてりくうどく
もりうきうどく
あひともえをそそ
えあんとくふよさりうも
てえあくたきせうとそ
うのゆりく

ちりりうさあくうき
とあしのうきがよよ
きをみてせえううせ
え。からんのそれどね
ねえすりゆき

うのやうとおうりゆき
んといふねいにゆき
きほし。といまのと
ぬきうとあくもさり
びきのきことあくと
きつてく

さうめやりそがりよせんせにあくせとふハモ
そととじよふくをそとそとわんとまよに金の
がくづよのまのとくとく。がりうははひとと園で
おおとよけのにれど。きりあひともえせ
でああバヒリの東たらあんととれ。男一个
れどちらの洞とあざせど。えあくだ。重やく窓え
ととくねはせ。ごとくとぞとづきうすに
うとてがくと。これでなれど
かうべへとれどりとみえす。あきも
さうして。まかひす。あのきれういはいまの
まくと。可れも急とくとばぐ
もごうよりへきてはあえなふ

。又おのの園へとく
かわまきえんとふ食を
えやまくとくとくとく
とくとくとくとくとく
星うらゆの地く
うらゆくとくとくとく
七十 終の宿らぬ
ちの宿とゆくとくとく
おやまのとくとく
尾もられぬとく
のとくとくとくとく
せよりうつふせよ
業辛とをうてゆくとく
てつるあらかるか
めえととまくとくとく
殿のとくとくとくとく
うくとくとくとくとく
つまうまくとくとく
だくとくとくとくとく
七十一 やう役うく

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
うねく文波天音く。じとあこむてのりうく
首男かり。役うりうりうりうりうりうりうり
ゆりゆりゆり。秋のまのまのまのまのまのまの
かうるうるが。うううううううううううう
高男伴。身のまのまのまのまのまのまのまの
うれがのまのまのまのまのまのまのまのまの
あやかれ。身のまのまのまのまのまのまのまの
たれと

高男をそとまのまのまのまのまのまのまのまの
も男伴勢のまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

御事よりくまうしまる

葉年よりまく

まくやすり——木の

がんこくぐりよあらわ

葉年とまく

うきどこゆうへはまく

うきどこゆうへはまく

まくやまく

三十三

色わぬ

せわらうと

ひまく

三十四

岩

かわ

三十五

男。女

とく

三十六

男。女

とく

三十七

大滝

かわ

三十八

女

とく

三十九

女

とく

四十

女

とく

